

特集にあたって

鈴木 正 美

新潟大学コアステーション「〈声〉とテキスト論研究センター」は、2016年度新たに「〈声〉とテキスト論教育研究センター」となり、構成員も18名から26名に増えた。当面は、〈声〉と制度の様々な関係を、歴史的かつ領域横断的に検討するために、各国文学（日本文学、中国文学、朝鮮文学、イギリス文学、フランス文学、ロシア文学、アメリカ文学）、映像論、啓蒙思想、芸能論、音楽教育、美術教育などを専門とする研究者をメンバーとし、さらに、従来からのボルドー第3大学の研究グループ（「モデルニテ」）と連携し、国内の他大学の研究者（とりわけ、人文学部と交流協定を締結している愛媛大学法文学部、岩手大学人文社会科学部）にも参加を呼びかけ、〈声〉に関する国際的かつ領域横断的な共同研究体制を確立し、研究拠点形成するべく活動している。

2016年7月15日には、「モデルニテ」研究代表のエリック・ブノワ教授による講演「文学における宗教と民族」を開催した。日本、アフリカ、フランス、パラグアイ、中国等、広範にわたるさまざまな国の民族と宗教との対話と衝突（接触、受容、交流、軋轢、弾圧、排除）に関する壮大な研究の一部が本講演で披瀝された。主に遠藤周作の小説『沈黙』（1966）を取り上げ、この物語の中で常に問われ続ける神の存在と不在というテーマを軸に、「他者の文化」をいかに理解するのか、あるいはなぜ理解できないのかという根本的な問題に取り組む本講演は、スコセッシ監督作品『沈黙』（2016）が世界的評価を受けている現在、きわめて貴重なものであった。

齋藤陽一の論文「日本におけるスタニスラフスキー・システム4——八田元夫をめぐる」は、スタニスラフスキー・システムを再検証する一連の研究の最新論考である。日本の演劇界において、スタニスラフスキー・システムは、俳

優の養成術としていまだに有効であると思われる。だが、実際に演劇活動に従事している人間からは、「すでに乗り越えた」「古い」という感情以上に、どこか拒否反応のようなものが感じられる。それは、何故なのか。今回は、戦前に新築地劇団などに所属し、戦後、東京演劇ゼミナールで活動した八田元夫と俳優座の演出家、千田是也との論争を、まず、手がかりとし、その後の八田の主張も参考にして、「拒否反応」が出来てしまう遠因を考察している。

鈴木正美「ラーゲリの中のジャズ——スターリン体制下のジャズと大衆歌謡(5)」は、シベリアの収容所でどのような音楽が演奏されていたのかを論じている。ソ連時代を代表するトランペットの名手エディ・ロズネル(1910-1976)は、ドイツ・ジャズ史、ポーランド・ジャズ史にも足跡を残し、第2次世界大戦中はバロルシア・ソビエト社会主義共和国・国立ジャズ・オーケストラの指揮者として活躍した。しかし、大戦後まもなく逮捕され、ハバロフスクのラーゲリに送られ、その後ラーゲリの中でもっとも過酷だったマガダンのコルイマ収容所に収監された。娯楽のない地方都市であるが故に、娯楽に飢えた人々の要望に応じて、ロズネルはジャズ・オーケストラを組織し、極東各地の収容所を演奏して回った。本稿ではそうした収容所での音楽生活の一端について明らかにしようと試みている。

高橋秀樹の論文「平曲における「揃物／カタログス」——古代ギリシアの叙事詩との比較から——は平曲における叙述の一特徴に注目する。口演された文芸としての軍記物に見られる要素として、「揃物／カタログス」と呼ばれるものがある。作品で描かれる合戦の参戦者を列挙していく部分である。人名が延々と羅列されていくだけに見えるので、一般的にはその文学的ないし文芸的意味が取り上げられることは少ない。しかし、『平曲』と古代ギリシアの英雄叙事詩『イーリアス』の当該部分を比較しながら考えていくと、作品構成上の重要な役割を果たしていることが分かるのである。

鈴木孝庸の論文「平曲「木曾最期」の〈語り〉」は、音楽と〈語り〉の間の本質的な問題に迫る。平曲(平家琵琶)の曲節のうち〈拾・ひろい〉は、躍動的な場面(武装描写、戦闘描写など)を効果的に扱い、一定の音楽的パターンで表現される。ところが、「木曾最期」の〈拾〉は、他の類似の場面とは異なる

る、この章段に限ってと思われる希な配慮が認められる。それは、音楽的な力が、木曾義仲の最期を伝える〈語り〉のために、パターンを乗り越えてまでも介入したためであろう。本稿は、以上のことを平曲譜本『平家正節』の体系の中で確認し、さらに他の譜本と比較することで、『正節』以前の〈語り〉のあり方を推測しようとする論考である。